九月二五日（月）

沙綾は、一人分も残っていなさそうなカレーに水を注いだ。片手鍋の持ち手を両手で握り、適当なところで蛇口を締めた。慎重にコンロへ鍋を置き、電源を入れる。彼女はお玉を鍋に入れ、温まるのを待ちながらゆっくりかき混ぜていく。

「えーっと、それから……」

彼女は引き出しを探り、何を足すか考えている。顆粒の昆布出汁と、顆粒のカツオ出汁を見比べながら、唸り声を上げた。

「どっちかっていうと、カツオの方が合うんじゃないか？」

「そう？　まぁ、一輝の好みに任せるけど」

沙綾は昆布出汁を袋に戻し、カツオ出しの小袋を開けた。勢いよく全部入れようとするから、途中で「半分ぐらいでいいんじゃないか？」と声をかける。

「全部は多いって」

「ちょっとぐらい濃い方が美味しい気もするけど、まあいいや」

半分より少し多めに入ったところで彼女は手を止めた。袋の口を何度か折り曲げ、塩や砂糖の隣に置いた。出汁が溶けるように混ぜながら「美味しくなかったら、一輝のせいね」と笑って言った。

「分かってる、分かってる。で、次は」

沙綾は僕が言い終わるより早く、冷蔵庫からカットネギを取り出した。うどん二玉と共に、僕が帰り道のコンビニで買って来た追加の食材。白ネギか青ネギを大きめに切って入れるのも美味いと思うけど、ネギを切る手間を考えたら、カットネギで十分だ。

「ネギを入れるんでしょ？　言われなくても分かってるって」

彼女はカットネギの蓋を開け、徐々に煮立って来た鍋の中を見ながら、「本当に、全部入れるの？」と疑いの目で僕を見つめる。

「全部は多くない？」

「大丈夫、大丈夫。それに、残したって使わないだろ」

彼女は、裏返しにした蓋を元に戻し、蓋についた注意書きを読んだ。賞味期限は明日になっている。ここで使い切らないと、賞味期限までに消費する可能性は

非常に低い。沙綾は「それもそうね」とネギがたっぷり入ったパックを鍋の上でひっくり返した。

パックに張り付いたネギも、しっかり手で拾っていく。綺麗に空になったパックはゴミ箱に捨てられた。

「で、うどんだ」

沙綾は冷蔵庫からうどんを二袋取り出した。裏面を見て、「あ、しまった」と声を上げた。

「うどんは別で茹でた方が良かった？」

沙綾は僕に疑問を投げかける。そのままカレーの出汁に放り込んで茹でれば完成なんだけど、二人分に分けることを考えたら別に茹でた方が良かったか。

「OK、分かった。とりあえずお湯を沸かそう」

沙綾は片手鍋の火力を最低に落とし、別の鍋に水をたっぷり張って、隣のコンロにそれをセットした。少々強めの火力で沸騰させにいく。うどん用のお湯が沸くまで、沙綾はカレーの鍋が焦げ付かないよう、ゆっくりお玉でかき混ぜ続けている。

「で、金曜日は半休なんだっけ？」

彼女はうどんが入った袋の裏面を読みながら、もう一方の手を動かし続けている。

「社長がパーティに出席するから、急ぎの仕事がない連中は休みでいいんだって」

「なんだかんだで、哲朗くんのご両親てスゴいのね」

沙綾は隣の鍋を気にかけながら、間が持たないのか、うどんの袋を二つとも開け始める。流石にお湯の中には入れないらしく、一旦そこまでで手を止めた。

「急に言われてもスケジュールは動かせないから、一人で楽しんで」

彼女は、ボコボコと沸騰し始めた鍋の火力を少し下げ、カレーの方は一旦スイッチを切った。お湯の中へうどんを放り込み、引き出しから菜箸を取り出してかき混ぜ始める。

袋の表示によると、茹で時間は九〇秒。スマホのタイマーを起動して、僕は湯切り用のザルを探しにキッチンへ足を踏み入れた。

初出　令和三年一〇月一五日　NOVEL DAYSにて公開